

## 統語論・意味論・形態論の研究(1)

池内正幸

まず、もう1つの「巨星墮つ」の悲報から、今年も現代言語学・生成文法の草創期を代表する先生のお一人がこの世を去られた。2017年5月3日、神田外語大学名誉教授井上和子先生が逝去された。享年98。大阪府生まれ。津田英学塾(現津田塾大学)卒業後、米ミルズ大学を経て、米ミシガン大学大学院博士課程修了(Ph.D. 1964年)。国際基督教大学教授、津田塾大学教授、神田外語大学教授を歴任。この間、日本言語学会会長、神田外語大学学長、また、日本言語学会顧問、日本英語学会顧問、社団法人全国外国語教育振興協会理事長などを務められた。1996年春に勲三等宝冠章を受賞されている。いずれも必読文献であった御著書に、*A Study of Japanese Syntax* (The Hague: Mouton)、『変形文法と日本語(上・下)』(大修館書店)、『日本語の文法規則——日英対照』(大修館書店)があり、翻訳書に、E・バック『変形文法』(大修館書店)、ノーム・チョムスキー『言語論——人間科学的省察』(共訳)(大修館書店)等々がある。井上先生は、特に日本語・英語の分析を通じた生成文法理論の研究で、日本の、そして国際的に言語学・英語学界を長い事引っ張って来られた。お歳を召されてからもよく学会にいらっしゃって、あの柔和な笑顔で若い人たちとも気軽に話されていたのが思い出される。ご冥福をお祈り致します。

また、2017年版「回顧と展望」で既報の通り、2015年12月に東京教育大学名誉教授太田朗先生が、そして、2016年5月に東北大学名誉教授安井稔先生が逝去されている。

さらに、財団法人語学教育研究所主催の市河賞が、奇しくも、2016年度に第50回目の授賞をもって終了した。太田、安井両先生は、草創期の市河賞選考委員会の委員を務められた。

筆者にとっては、これらは、現代英語学・言語学の1つの“時代”が終わったことを象徴しているかのようにも思われる。

そして、さらには、奇しくも2016年は、1966年東京言語研究所主催の「理論言語学セミナー」にNoam Chomskyが初来日して以来ちょうど50年に当たる。そのChomskyは、ついにMITを離れ、2017年秋からアリゾナ大学に移ったのである。

このような状況・背景の中で、本稿ではまずChomsky関係を2つ取り上げることにする。以下敬称を略する場合がある。

最初に、1992年刊行の原口庄輔・中村捷編『チョムスキー理論辞典』の増補版である、原口庄輔・中村捷・金子義明(編)『増補版 チョムスキー理論辞典』(研究社)を

## 回顧と展望

取り上げる。筆者も、旧版は、必ず学生・院生に紹介し、また、これまで繁く活用させていただいた。本稿の訳語も基本的にはこの両書によっている。「はしがき」にあるように、旧版が「GB理論」についての辞典であったのに対して、本文168ページに及ぶ増補部分は「極小主義プログラム (Minimalist Program, MP)」の辞典となっている。その意味でも待望久しい新版の刊行である。旧版が、「本辞典の説明は、可能な限り平易かつ明解を目指し、…大学1年生もしくは3年生レベルの英語学の概論などで、生成文法に関する概観を得る上で利用できることはもちろん…」とあり、読者としては「初心者」も対象にしていたが、この増補版のはしがきに、「本辞典は「辞典」ではあるが、「引く」ものではなくて、「読む」ものであると考えている。特に若い研究者には初めから終わりまで通読することを奨めたい」とあるように、増補部分の読者対象は大学院生以上と想定されているように思われる。そして、項目によって多少のパラツキはあるものの、編者の意図通り全体として極めて読み応えがあるものとなっている。項目選択も概ね妥当だと思われる。時間的に1992年以前の研究であってもその後のMPでの議論に(深く)関係しているものは取り上げている (Parallel structure, Quantifier raising など)。 (旧版でもそうであったと思うが) 特定の言語事象・構文 (Multiple *wh*-movement, Object shift など) については、実例を挙げて丁寧に解説しているのも上記のような意図が背景にあるということであろう。また、Null hypothesis を項目として採用しているのには編者の卓見とこだわりが見て取れるように思う。ただ、1つ指摘できるとすれば、Chomsky 自身が以前からそしてこここのところ極めて頻繁に発言している “the origins and evolution of language” (についての生成的シナリオ) が項目として採用されていないのが惜しまれる。Minimalist program, Strong minimalist thesis (SMT), Optimality, Perfect system などの項で、しばしば「最適(性)」、「完璧」などの用語が出てきているが、それらの根底には言語の起源・進化における「言語の最近の、そして突然の創発」という考え方があるのは周知の通りである (たとえば、増補部参考文献にある Chomsky (2016a: 25) ほか)。ともあれ、本辞典の類は、そして、「チョムスキー理論」に関わる場合にはなおのこと、「時間との戦い」があるのだが、ここ当分の間必ずや多くの研究者・学生に活用されることになるのは間違いないであろう。

次に、Chomsky 関係の翻訳、成田広樹 (訳) 『チョムスキー 言語の科学——ことば・心・人間本性』(岩波書店) を取り上げる。これは、原著 Noam Chomsky (2012) *The Science of Language: Interviews with James McGilvray* (Cambridge University Press) の (Appendix など一部を割愛した) 翻訳である。原著には、McGilvray による解説・付録などが付いているが、メインは、彼による2004年、一部2009年のチョムスキーへのインタビューの記録である。その意味で、チョムスキーの“生の声”を聞ける/読める感じがあり、極めて貴重であり非常に面白い。また、原著は、“While this

book will be of interest to the specialist, it is intended for a general audience.” (p. 1) としているが、「一般読者」というのがどの範囲の読者を指すのか必ずしも定かではないが)やはり、ある一定レベル以上の専門家や(大)学(院)生にとって極めて興味深いものとなっていると言ってよいと思う。訳文もこなれていて読み易く、また、巻末にいくつかの重要な「問いの索引」を付すという独自の工夫がしてあるのが特筆される。ただ、「…特に一般読者の理解に資することを第一に考えて」(p. 16)など、この翻訳自体も一般読者向けを特に意識しているというのであれば、訳者による「序」をもうすこし「ゆるい」導入から始めてもよかつたのではないかと思われる。ともあれ、この翻訳は、他領域の研究者などにも有用であると思う。

なお、辞(事)典には、翻訳であるが、外池滋生(監訳)『統語論キーターム事典』(開拓社)もある。原著は、Silvia Luraghi and Claudia Parodi (2008) *Key Terms in Syntax and Syntactic Theory* (Continuum)である。これは、Key Terms シリーズの一冊で、今井邦彦(監訳)のニコラス・アロット『語用論キーターム事典』(開拓社、2015年版本欄で紹介)、同リン・マーフィーとアヌ・コスケラ『意味論キーターム事典』(開拓社、2017年版で紹介)などの姉妹版である。主要用語が手短かに解説してある。特徴としては、キータームの解説の前に、自律語彙文法 (Autolexical Grammar) を始めとする 27 の主要理論の概説があること、また、その後、L. Bloomfield ほか 29 人の主要言語学研究者の紹介が続くということが挙げられるであろう。その意味でも、この翻訳書は他分野の研究者にも有用であると思われる。

次に、開拓社から出た単行書を 2 点。

最初に、Jun Yashima, *Antilogophoricity and Binding Theory* (Kaitakusha) を取り上げる。これは、八島が、2015 年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校に提出した Ph.D. dissertation, *Antilogophoricity: In Conspiracy with the Binding Theory* の改訂版である。本書の中心的目標は、自然言語の照応解釈における反発話主体指向性 (antilogophoricity) の性質と役割を明らかにすることにある。そのために、日本語の音形のある三人称代名詞 (kare, kanozyo) と、英語の名辞 (name) の特性を探る。まず、束縛理論の復習をし、そして、発話主体指向性 (logophoricity) について、その領域 (domain) と発話主体指向先行詞 (logocentric antecedent) の特性を的確にまとめ、反発話主体指向性を「ある表現がある所与の文脈において発話主体の中心である先行詞と非同指示的 (disjoint) にならなければならないという現象」と述べる。次に、日本語の三人称代名詞についての多くの先行研究を精査しつつ基本的事実を把握し、その際、それぞれの分析への反例等を確認しながら、日本語の三人称代名詞は英語の idiot, bastard のような罵り語 (epithet) であると提案する。合わせて、英語の名辞と日本語の発話主体指向照応形 zibun を対照し、結論として、2 つのタイプの反発話主体指向性を主張する: a. 名辞は、全ての潜在的な発話主体指向先行詞 (SOURCE, SELF,

PIVOT)と非同一指示的でなければならない, b. 罵り語は, SOURCEとSELFである発話主体指向先行詞と非同一指示的でなければならない(束縛条件(B)も適用される)。さらに, 反発話主体指向照応形が, 同格句内に置かれた時, または, 介在文脈に置かれた時は, 反発話主体指向性の制限が迂回される(circumvent)とする。また, 反発話主体指向性の制限と束縛条件(C)はそれぞれ独立に動機付けられ, 作業分担があると主張する。ただし, 条件(C)の領域は従来想定されていたより狭いことが示唆される。これらにより, さまざまな事実が見事に説明される。全体としてよくまとまっており, 理路整然とした議論がなされていて読み易いという印象を持った。残る問題は, 著者も指摘しているようにいくつかあるが, より具体的には, 上記のSOURCE, SELF, PIVOTに明示的な定義を与えることも含まれるであろう。

次は, Hiroki Egashira, *On Extraction from Subjects: An Excorporation Account* (Kaitakusha)である。これは, 2014年に青山学院大学に提出した江頭の博士論文の修正版である。本書は, MPの枠組み(Chomsky(2008))に拠って, いわゆる主語条件の現象を包括的に分析・説明しようとする試みである。この主語条件は, MP以前には, その定式化に関してさまざまな提案があったが, いずれにせよUGの中に想定される生得的な条件・制約であった。が, MPでは, 進化の視点から明らかなように, UGの条件ではあり得ず被説明項となった。本書の分析は, これらの先行研究を復習した上で, Chomsky(2008)によるMPでの扱いに対する代案という形で提案される。本書では, 素性継承(feature inheritance)や拡張条件(Extension Condition)に絡む問題点を回避・克服するために想定される編出(Excorporation), A連鎖の先頭要素の主要部であるDとNは, その解釈不可能素性が値を与えられるとその後の演算には不可視となるという改定不活性条件(Revised Inactivity Condition), 内的併合(Internal Merge)は音形を持つ要素を移動しなければならないという, 内的併合だけに課される顕在的統語論仮説(Overt Syntax Hypothesis), wh疑問詞に付与されるF素性とフェイズ主要部に付与される[uF], C-T-willのような語彙複合体(lexical complex), TPであり同時にCPであるという二重範疇投射(dual-categorial projection), V/Pとv\*による同時一致/統語関係(simultaneous agreement/syntactic relation)など, 多くの仕組みが想定される。これらにより, 他動詞の主語からのwh句の下位抽出, 不定詞の主語としてのfor句からの下位抽出, ECM, Acc-ing動名詞, 知覚動詞・使役動詞補文の主語からの下位抽出, 受け身文・非対格構文の主語からの下位抽出, および, 顕在的補文標識コピー効果(Overt Complementizer Copy effect)(=that/for痕跡効果)としてのECP現象など, さまざまな事実を広範にカバーする。ある場合にはやや複雑であるという印象があるが, 総じて極めて巧みな分析・記述がなされていると言える。しかし, ここでは詳細に立ち入る余裕はないが, 上記の仕組み・装置の厳密な定義やステータスなどに関するMP/SMTの視点からの, あってしかなるべきと思われる

理論的考察が不十分である感は否めない。Chomsky (2013)以降、MPに拠る中核統語部門は自由併合 (free Merge) のみを含むという方向への展開となっている。その文脈で、今後、本書が想定する上記の仕組みや装置などが、どのようにして第三要因条件やインターフェイス条件に還元されるのか、あるいは、できないのかが検討課題となるということであろう。

続いて、テーマを決めた論文集を取り上げる。最初は、Miyoko Yasui and Manabu Mizuguchi (eds.) *Phase Theory and Its Consequences: The Initial and Recursive Symbol S* (Kaitakusha)である。これは、2つのワークショップ、2014年11月7日の“Phase and Merge” (於獨協大学) と同11月8日の“On the Phasehood of CP and Other Projections” (於日本英語学会年次大会) からの5つの論文から成っている。その中の1編、Hidekazu Tanaka, “Island Repair and the Derivation by Phase”を取り上げる。この論文では、まず、いくつかの消去 (ellipsis) の中には、島の修復 (island repair) をもたらすものと、そうでないものがあり、それぞれを英語 (E) と日本語 (J) において同定する。前者には、間接疑問縮約 (sluicing) (E) と間接疑問縮約右方転移 (sluicing RD) (J) があり、後者には、sprouting, 対照的 else 間接疑問縮約 (contrastive else sluicing), 付加詞間接疑問縮約 (adjunct sluicing), 先行詞内削除 (ACD) (E), そして、sprouting 右方転移, 「も」右方転移 (also-RD), 付加詞右方転移 (adjunct RD) (J) がある。そして、基本的には、島の修復を可能にする前者の消去では、先行詞 TP の中に、残部 (remnant) と同一指示的な変項となりうる相関する句が存在するが、後者には存在しない。これらの振る舞いを、LF 転写 (LF copying) と、フェイズ・リサイクル (phase recycling) に拠る PF 削除 (PF deletion) によって説明しようとする。前者のグループの消去は、先行詞 TP の LF 転写によって束縛を保証するような構造が得られるが、後者のグループではそれが得られず、したがって、フェイズ・リサイクルによる島の違反を含まざるを得ない派生と PF 削除が必要になる、というのが決定的なポイントである。他に、Željko Bošković, “Contextual Phasehood and the Ban on Extraction from Complements of Lexical Heads: When Does X Become a Phase?”, Manabu Mizuguchi, “Simplest Merge, Labeling, and A'-Movement of the Subject”, Miyoko Yasui and Yoshiro Asayama, “Labeling Ambiguity in the Root Context and Sentence-Final Particles”, Kazuhide Chonan, “Verbal Affix Deletion in Indonesian Quotative Inversion” が所収されている。

ほぼ同趣旨の論集が2点出ている。まず、田中智之・中川直志・久米祐介・山村崇斗 (編) 『文法変化と言語理論』(開拓社)である。本書は、名古屋大学大学院文学研究科英語学研究室の教員・修生・院生らによる最新の理論的英語史研究の成果を収めたものであり、同時に、名古屋大学名誉教授中野弘三氏の傘寿と、名古屋大学教授大室剛志氏の還暦を祝い記念論集ともなっている。「はしがき」にあるように、目指すと

ころは、「統語・意味・形態など文法の諸領域に見られる史的变化を単に記述するだけでなく、生成文法を中心とする言語理論に基づき説明しようとする、さらにそれを通じて言語理論の発展に貢献しようとする」というものである。2編取り上げる。田中智之「英語史におけるOV語順の消失——不定詞節を中心に」は、コントロール不定詞節中のOV語順が16世紀中に消失したことを歴史コーパスにより示すとともに、それをMPの枠組みで説明しようとする試みである。古英語から16世紀までのコントロール不定詞節は、機能範疇TとC、そしてPRO主語を欠いており、不定詞のvPがフェイズを形成していなかった。したがって、14世紀中にOV基底語順が消失したのだが、その後もVO基底語順において目的語の左方移動が可能であったので、不定詞形態素が存在していた16世紀までOV語順が存続していた。その後、コントロール不定詞節がT、C、PROを備え持つようになって、vPがフェイズとしてのステータスを確立したことにより、目的語の左方移動が不可能になったので、この新構造に一元化された16世紀中にOV語順が消失した、と説く。中川直志「tough構文における受動不定詞の出現と消失について」は、tough構文の不定詞節として受動不定詞が14世紀の終わりごろから出現し、初期近代英語期には衰退に向かったという現象を、生成文法による歴史的統語分析によって説明しようとするものである。Tough(構文の不定詞)節は、古英語期以来、PP、VP、そして、初期近代英語期以降には弱フェイズとしてのvPに拡張したと想定する。すなわち、助動詞が生起できるようなTの位置がないとする。一方、受動構文の統語的変遷に関連して、1500年ごろまでのbeはまだ本動詞的な統語解釈も可能であった。これに対し、1500年以降にはbeの助動詞としての地位が確立された。したがって、beが本動詞の位置に具現できた1500年ごろまではtough節に受動不定詞が可能であったが、beが助動詞として確立した1500年以降は上に示すようにTがないのでそれが不可能となり、tough受動不定詞節は姿を消した、と主張する。これらの他に、近藤亮一「That痕跡効果の通時的変化について」、中野弘三「近・現代英語における焦点化副詞の用法の変遷——justを中心に」、縄田裕幸「I know not why——後期近代英語における残留動詞移動」、横越梓「英語の史的発達にみる小節構造の変化について」などを含めて、22名の執筆者による(「はしがき」には23編とあるが)全22編の論文が所収されている。

次は、小川芳樹・長野明子・菊地朗(編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』(開拓社)である。この論集は、自然言語の通時的変化や共時的変異に関する新事実をコーパスを用いて発掘し、それらの理論的説明と理論的貢献を探るべく、言語学の様々な領域の研究者を学内外から集めて、東北大学大学院情報科学研究科内に2013年2月に設置された「言語変化・変異研究ユニット」の過去3年間の研究成果をまとめたものである。5つのパートに分けて収録されている: Part I: 英語の構文変化とコーパス(以下、IVまで「とコーパス」を省略)、II: 日本語の構文変化、III: 日英

比較・方言研究・言語類型論, IV: 言語獲得, V: コーパス・自然言語処理の現状と課題. 冒頭に, 編者による「概観——言語変化・変異の研究とコーパス」と題する, 言語研究とコーパスの関わりに関する幅広い視点からの論考がある. いわゆる大規模電子コーパスと研究目的や資料の相補性などについての, やや抑制的かとも思われるような書き振りの論述ではあるが, 極めて正確・的確で妥当な評価・考察がなされており, 非常に有益である. ここでは, 大規模電子コーパスを用いた典型的な研究例を2編ほど取り上げる. 大室剛志「構文の成立過程とその後の展開——半動名詞構文を中心に」は, 動詞 spend が取る半動名詞構文 (half-gerund construction) が, in 付き動名詞から派生体 (derivative form) として成立してくる過程を, COHA からの歴史的言語資料を用いて確証している. さらに, 一旦, 半動名詞構文が成立すると, その後の構文展開として, より有標な過去分詞句, 形容詞句といった他の叙述述語が可能になってくる歴史過程を, 同様に COHA からのデータに基づいて, その出現時期と使用頻度に着目して検証し, 動的な語彙意味論の必要性を示唆している. 杉崎鉦司「英語獲得に見られる助動詞 do の一致に関する誤り——素性継承に基づく分析」は, 英語母語獲得過程において観察される助動詞 do の一致に関する誤りの否定文と疑問文間での非対称性を, CHILDES を用いてより広範な幼児発話データに基づいて確認する. その後, この現象を MP における素性継承の随意性によって説明しようと試みる. これは, 言語獲得から, 素性継承のメカニズムの存在に対して証拠を提示するものとなっている. これらの他, 秋元実治による特別寄稿「イディオムの前置詞句の発達——特に bring, put 及び set との関係で」, 縄田裕幸「英語主語位置の通時的下方推移分析」, 菊地朗「日本語比較表現における形式名詞の非音声化について」, 小川芳樹「日英語の等位同格構文と同格複合語の統語構造と構文化についての共時的・通時的考察」, 大名力「I 言語研究とコーパスデータ」などを含めて, 27人の執筆者による全24編の論文が収録されている.

次に, 記念論集を2点. 菊地朗・秋孝道・鈴木亨・富澤直人・山岸達弥・北田伸一(編)『言語学の現在を知る26考 26 Essays in Current Linguistic Research』(研究社)は, 友人, 教え子, 同僚らの寄稿による丸田忠雄東京理科大学教授の定年退職記念論集である. 28名の執筆者による26編の論文を所収. 高見健一・行田勇・大野英樹(編)『〈不思議〉に満ちたことばの世界 上・下』(開拓社)は, 中島平三学習院大学教授の退職記念論集である. I. ことばの面白さ, II. ことばの発達と障害, III. ことばの誕生と変化, IV. ことばと社会, V. ことばの教育, VI. ことばの音と発音(上巻), I. ことばの仕組み——文法, II. ことばの仕組み——意味, III. ことばの仕組み——語用(下巻)の9セクションに分かれ, ひとり5ページの長さではあるものの, 前代未聞ともいべき総勢96名の執筆者による95編の論考を所収する. まさに, 氏の幅広く深い研究・研究領域と豊かな交友関係を如実に示すものである.

## 回顧と展望

その他、日本語の文法および獲得に関する主要なテーマを扱った13章から成る村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介(編)『日本語文法ハンドブック——言語理論と言語獲得の観点から』(開拓社)がある。執筆者は、編者の他、藤井友比呂、岸本秀樹、越智正男、高橋大厚、杉崎鉦司、高野祐二の諸氏。形態論に、漆原朗子(編)『形態論 朝倉日英対照言語学シリーズ 4』(朝倉書店)。執筆者は、他に、岸本秀樹、高橋勝忠、西山國雄、伊藤たかね、杉岡洋子、松本裕治。いわゆるGB理論の概説であり、実は中級レベルの授業での活用が望ましいとされる入門書として阿部潤『生成統語論入門——普遍文法の解明に向けて』(開拓社)。(名古屋外国語大学教授)